

社会福祉協議会会長賞

堺市立 北八下小学校 六年

蔭山 幹

社会を明るくする「あいさつ運動」

ぼくは五年生のときから児童会に入っています。児童会の活動の一つに、毎朝、校門の近くで登校した人たちに「おはようございます。」と、あいさつをする「あいさつ運動」というものがあります。ぼくはこの「あいさつ運動」に特に力を入れて活動しています。

なぜぼくがその「あいさつ運動」に特に力を入れたと思ったかという点、理由は二つあります。一つ目の理由は、あいさつは一年生から六年生までだれでも、すぐにでも始められるからです。そして、二つ目の理由は、登校してすぐにあいさつすること、一日を明るい気持ちで過ごすことのできるようになると思うからです。

ただ、「あいさつ運動」をする中で、あることに気づきました。それは、あいさつを返してくれる人はいるけれど、やっぱり友だちとの話に夢中であいさつを返してくれない人もいることです。

そこで、児童会であいさつを返してくれない人があいさつを返してくれるように、いろいろな改ぜん策を考えて、取り組んでき

ました。例えば、ポスターを持ちながら「あいさつ運動」をすることで、校門を通る人たちにアピールしてみました。すると、そのポスターを見て、あいさつを返してくれる人が増えました。さらに、あいさつをしてくれた人がまだあいさつをしていない人に「あいさつしよう！」と声をかけてくれるようになったのもよかったです。でも、まだあいさつをしてくれない人はいました。

実は、ぼく自身、三年生まではあいさつがなぜ大切なことなのかわからなくて、あいさつをしなかったときがありました。その後、四年生の終わりになって、児童会に入ることが決まって、児童会の人に児童会はどんなことをするのか聞いてみました。児童会の人には「あいさつ運動をしたりするんだよ。」と教えてくれました。そのときは「あいさつって大切なことなのかな。」と考えながら、「あいさつ運動」を始めました。そして、あいさつを返してくれる人が少なくて、すごく悲しい思いをしました。

でも、自分も児童会に入るまではあいさつをされる側だったから、あいさつをしないことで、人がそんなに悲しい気持ちになる

なんて思いませんでした。でも、あいさつを自分からする側になつてみて、あいさつを返してくれないことはすごく悲しいことだと気づきました。

このできごとをきっかけに、あいさつの大切さをすごく感じるようになりました。あいさつをすると、あいさつをする側もされる側も自然とうれしい気持ちになっていきます。だから、ぼくはあいさつをされたときはもちろん、されてなくても自分からあいさつをするようにしています。ぼくは学校の中だけで「あいさつ運動」をしています。ふだんの生活の中でも一人一人があいさつを大切にしていけば、みんながあたたかい気持ちになっていくのではないかと思います。

また、あいさつにはいろいろな種類があると考えています。「ありがとう。」と感謝の気持ちを伝えることもあいさつの一つです。こまっている人がいたら「大丈夫？」と声をかけてあげるのもあいさつの一つです。このように、生活していく中で人と人がコミュニケーションをとるときに、一番初めにするのがあいさつだとぼくは思います。

こうして、一人一人が進んであいさつをしていけば、小学校がいつも楽しく過ごせる環境になっていくはず。そして、学校だけでなく地域の人たちにもあいさつを広げていけば、明るく楽しい気持ちが自然と広がっていくのではないのでしょうか。学校か

ら地域、やがては日本中へとあいさつが広がれば、この日本全体が明るく楽しいものになると思っています。だから、みんなが明るい気持ちになるあいさつを自分も、みんなもしていけば社会は明るくなると信じています。一人一人のあいさつにこめられた気持ち、とても大きなものになると、「あいさつ運動」を通じてぼくは考えました。

